

やまと 民俗への招待

桜井市の江包と大西の御綱祭りでは、二つの集落が作った雄綱と雌綱が、江包の素盞鳴神社前で一つに合体する。雄綱は江包の春日神社で作られ、雌綱は大西の市杵島神社で作られる。

素盞鳴神社は「綱掛神社」とも呼ばれ、かつては無格社だった小祠で、洪水時に流れてきたのを拾い上げてまつり始めたと伝えられている。磯城郡の祭祀行事を調査した辻本好孝は1940(昭和15)年に御綱祭りを実見して、江包の田村金藏と

いう幕末から明治にかけての人が書き記した資料も掲載している(『和州祭祀記』1944年)。それによれば、素盞鳴神は809(大同4)年の大洪水で三輪明神の氏子がまつっていた牛頭天王が光る御幣となって流れ着いたものだという。

その後、南隣の大西集落が災難除けに雌綱を奉納し、これを見た江包の人々が、雄綱を作るようになったという。



横たわる雄綱。奥では江包の男たちが泥相撲を始めている＝2月11日、筆者撮影

奇祭生んだ漂着伝承

う。洪水を大同年間とするのは古すぎるが、ころなど、牛頭天王の神を拾い上げる経緯や「漂着」と創祀に関わ

る事情が反映しているのかもしれない。稲田姫は「御綱神社」として現在のは市杵島神社境内にまつられているが、もとは大西南端にあったという。詳細は不明ながら、「初瀬流れ」とも呼ばれる大水による牛頭天王の漂着伝承があり、この荒ぶる男神の力を頼りに、疫病や水難などの災難除けにまつり始めたところ、神話を熟知した大西の人々が雌綱

で呼応し、さらに江包側が雄綱を作り出して「神の婚姻」の原型が出来上がり、次第に豊穡への願いも込められたと思われる。

辻本好孝はこの行事を、「日本古代文化の姿を今に伝える神事」と記し、「猟奇的な原始神事」とも表現しているが、純農村で続けられてきたこの行事の圧倒的な迫力は、人々に古き時代を想起させるのに十分だったのだろう。

(奈良民俗文化研究所代表・鹿谷勲)

隔週掲載